

# 教員養成段階における小学生とのオンライン交流会の取組： 体育授業の実践

糸岡 夕里, 日野 克博

愛媛大学教育学部

## The Attempt to Interact with Elementary School Students Online in the School Teacher Training Course: Practice of the Physical Education Class

Yuri ITOOKA, Katsuhiko HINO

Faculty of Education, Ehime University

### 1. はじめに

2019年(令和元年)12月, 当時の文部科学大臣(萩生田, 2019)より「子供たち一人ひとりに最適化され, 創造性を育む教育 ICT 環境の実現に向けて～令和時代のスタンダードとしての1人1台端末環境～」についてのメッセージが公表され, 「GIGA スクール構想の実現」へ向けた取組が進められることとなった。そして, その1ヶ月後には, 我が国において初めての新型コロナウイルスの感染者が確認され, 新型コロナウイルスの世界的な流行に伴い, 生活様式の大きな変化が求められることとなった。学校現場でも同様で, 2020年3月には全国一斉休校が要請され, 子供たちが登校しない間, どのように学力を保障するのかという対応に追われることとなり, 学校現場での1人1台端末環境について加速度的に整備されることとなった。

2021年1月には, 中央教育審議会(2021)より「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～(答申)」が示され, その改革の柱の1つとして「GIGA スクール構想の実現」が示された。

GIGA スクール構想の実現により, ICTの活用が充実する学習の例の1つとして, 遠隔教育が示されている。そこでは, 「大学・海外・専門家との連携や, 過疎地・離島の子供たちが多様な考えに触れる機会, 入院中の子供と教室をつないだ学び等」(GIGA スクール実現推進本部, 2019,

p.2) について示されている。

一方, 子どものからだと心・連絡会議が, 突然の臨時休校による子どものからだと心に及ぼす影響の緊急調査を実施した結果(コロナ緊急調査WG, 2020), 休校期間中の埼玉, 東京, 神奈川, 静岡の公立校に通う小中学生(n=2,423)の身体活動は二極化していたことが明らかとなった。さらに, 休校中は精神的ストレスが増して, 休校明けはからだに悲鳴をあげていること(身体的ストレス)が確認された。この調査対象は関東圏であったが, その他の地域においても同様の結果が得られることは想像に難くない。学校は子供を教育する場であることは当然であるが, これらの結果からは, 学校という環境が, 学力のみにとどまらず子供たちにとって必要不可欠な場であることがうかがえる。不要不急の外出自粛を要請され, 友達と会うことさえ制限された長期休校期間中は, 子供にとってはこれまでにない試練であったことを忘れてはいけない。

学校教育において体育授業では, 「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現する」(文部科学省, 2018, p.17)ことを目標として掲げていることから, これらのことに対する体育授業の役割は大きいといえる。

そこで本研究では, 小規模校の小中学生と大学生による体育授業をふまえたオンライン交流会を実施し, 参加者の感想等からその意義について検討することを目的とした。

## 2. 方法

### (1) 本取組の位置づけおよび概要

この取組は、2020年後期に開講された日野、糸岡の担当する「小学校サブコース演習」「保健体育学演習2」の授業において実施した。「小学校サブコース演習」は愛媛大学教育学部学校教育教員養成課程初等教育コース小学校サブコースに所属し、卒業研究の指導担当教員に日野を希望した3回生5名、同様に糸岡を希望した3回生4名が受講し、「保健体育学演習2」は、同課程中等教育コース保健体育専攻に所属し、卒業研究の指導担当教員に日野を希望した3回生1名が受講し、両授業ともに合同で実施した(受講学生合計10名)。

授業の内容は、前半(10月から11月にかけての8回)は体育授業の教材に対する理解を深めるため、教材実践を行い、その成果を検証するための分析方法について理解することをねらいとし、後半(12月から1月にかけての7回、プラスアルファの準備時間)はオンライン交流会へ向けた授業づくりの準備の時間とした。前半の教材理解については、全て対面で実施することができたが、後半のオンライン交流会へ向けた準備については、一部を遠隔により指導した。

### (2) オンライン交流会の概要

#### 【交流会の授業内容の検討】

オンライン交流会を実施するにあたり、愛媛県の公立A小学校の協力を得た。A小学校の児童数は、1年生3名、2年生6名、3年生5名、4年生3名、5年生7名、6年生3名であり、体育授業は複式学級で実施されている。A小学校とは、10年以上にわたり毎年1回の対面による交流を続けてきた。具体的には、低学年、中学年、高学年を対象に学生が考えた体育授業を1時間ずつ実践し、その授業をA小学校の先生方やA小学校の近隣の小学校の先生方(体育主任)に参観していただき、授業後に参観された先生方と一緒に授業についての協議の時間を設定していた。

コロナ禍に見舞われた2020年度は、この取組をオンライン交流会と位置づけて実施した。授業内容は、例年通り低・中・高学年の3グループに受講生を分け、1時間の授業(45分)を計画し実践することとした。1時間の主な流れとしては、オンライン(非対面)であるということから、図1に示した通り交流の時間を十分に確保するよう受講生へ提案し、それをふまえて受講生は各グループで具体的な内容を検討した。

A小学校のネット環境の都合上、A小学校の実践場所が音楽室となったこと、またZoomのカメラを移動しながら実践することは人的要因やどう撮るかという打合わせが困難であることから、カメラは固定した状態で実施することとした。

場所等の条件をふまえ、各グループの主な内容については、低学年が体づくりの運動遊び(多様な動きをつくる運動遊び)、中学年が表現運動(リズムダンス)、高学年がオリンピック・パラリンピックに関する指導(ボッチャの実践)であった(図2)。

12月から各グループに分かれ交流会の内容について3回の検討会を実施した。冬休み以降は、遠隔授業となったことから、担当学年別にZoomを使い、交流会の具体的な内容や誰がどのように担当するのか(模擬実践)、準備状況等の確認を3回行った。

内容(司会:大学生)	
5	1) あいさつ 2) 自己紹介 ・児童 ・大学生
10	3) ゲーム(アイズブレイク) ・クイズ大会 ・ジェスチャーゲーム ・かぶつちややーよゲーム など
10	4) 質問コーナー ・運動やスポーツの悩み相談(アドバイス)
15	5) レッツ エクササイズ ・簡単な運動を紹介して、実践する (コロナ禍でできる運動や運動遊び…非接触な活動)
5	6) ふりかえり

図1 1時間の主な流れ(参考例)

学年	児童数	内容	学生数
低学年	9名	体づくりの運動遊び (多様な動きをつくる運動遊び)	3名
中学年	8名	表現運動(リズムダンス)	3名
高学年	10名	オリンピック・パラリンピックに関する指導(ボッチャの実践)	4名

図2 各グループの主な内容

#### 【A小学校との打合せ】

打合わせについては、全てZoomで実施し、招待は大学教員から送った(図3)。1月に入り、A小学校の交流会をご担当いただくB教諭(体育主任)と大学教員とでネット環境、音響の確認、映像の確認等、Zoomでの事前打合わせを計4回、直前の打合せでは各グループ代表の学生も含めて実施した(写真1)。Zoomによる打合わせ以外にも、B教諭と大学教員、B教諭と学生の間でそれぞれに電話やメールによる確認等を行った。

またネット環境の確認については、実際のイベントを開催する同曜日、同時間帯にて、高学年を対象としたリハーサルを実施した。事前打合わせを通して、A小学校のB教諭にイベントの内容を説明し、サポートしていただきたい内容等を確認したり、用具等を事前に小学校へ送付した

りすることで、イベント当日のスムーズな運営に努めた。

音響について、大学では体育館を使用したことから、集音マイクを使用してもハウリングで聞き取りづらい状況であったことから、パソコンのマイクを利用し、話す人はパソコンの前に移動して話すこととした。図4は、大学体育館でのカメラ等の配置について示した。体育館に設置されている大型モニターの前に机を置き、その上に置いたパソコンでZoomのカメラとマイクを使用した。図4に示したようにコーンでカメラに収まる位置を確認し、斜線で示した範囲で実践し、話をする際にはパソコン前へ移動して話をする事とした。小学校も同様に、音楽室に準備したスクリーンの前にタブレットを置き、そのタブレットでZoomのカメラとマイクを使用し、話をする場合には、タブレットの前に移動して話をする事とした。また、大学の体育館同様、A小学校の音楽室でも動ける範囲がわかるようにカメラに収まる範囲にコーンを置いた。

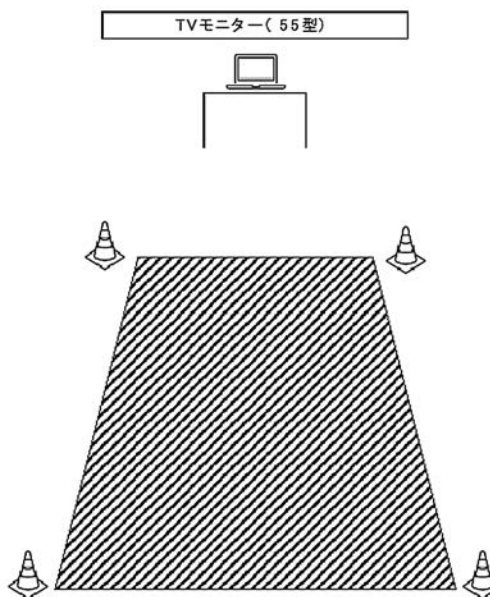


図4 大学体育館におけるカメラ等の配置

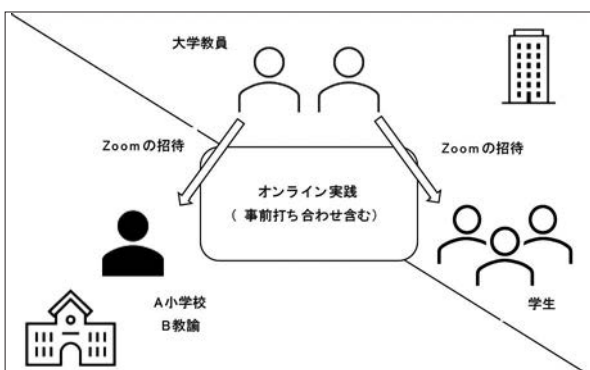


図3 Zoom開催の方法

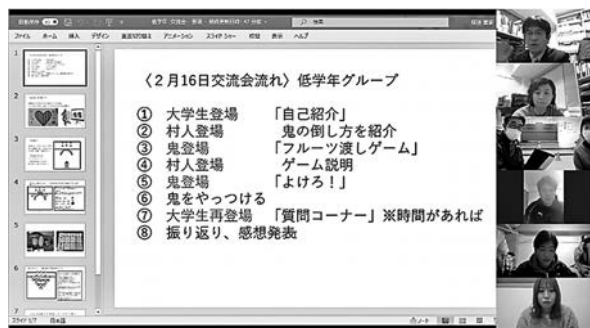


写真1 Zoom打合せの様子

大学のモニターにはA小学校の様子がメインで写るよう、小学校のスクリーンには大学の様子がメインで写るよう画面を固定し、実践を行った。

リハーサル実施後、B教諭より改善点等のレポート(図5)があり、それをふまえて改善し、最終確認とした。

①	大学生の画面がやや暗く、顔がはっきりと見えづらかったです。日光の向きや教室の明るさも関係しているとは思いますが、改善が図れたらと思います。
②	大学生が並んでの説明の声が少し小さく聞こえづらさを感じました。こちらの音量は上げています。カメラに近づいての自己紹介の時はしっかり聞こえたので、マイクとの距離かと思います。
③	小学校側のポツチャをしたときの球の様子を、もう少し近距離で写したほうが良かったかも…。
④	低学年の活動で、ケンステップの間隔が当初は広く、途中で狭くなりました。間隔の調整は、当日、画面を見ながら行います。
⑤	鬼を推していくなら、当日はぜひ鬼の姿で…(笑)。冗談ですが、何か工夫があると興味を引いてよいかと。
⑥	中学年のダンスで、今日の音源は音量が少なかつたように感じました。

図5 A小学校B教諭からの改善へ向けたレポート

### 【オンライン交流会の実践】

2021年2月16日(火)、低、中、高学年の順にオンライン交流会を行った。受講学生は体育館に集合し、愛媛大学の体育館とA小学校をオンラインでつなぐ方法で実施した。なお、Zoomの招待やカメラのセッティング等については、大学教員が実施した。

授業の内容は以下の通りであった。学生が作成した中学年の指導案の一部を図6に示した。

低学年：体づくり運動（多様な動きをつくる運動遊び）

- ・フルーツわたしゲーム
- ・リアクションゲーム（写真2）

中学年：表現運動（リズムダンス）

- ・エビカニクス

高学年：オリンピック・パラリンピックに関する指導

- ・ボッチャ（写真3）



写真3 高学年のボッチャの様子

A 小学校指導案（中学年）

展開	学習活動	内容
0	準備	児童→制服の上から決められた番号のピブスを着用し、音楽室のステージの上に整列。 大学生→授業準備。 先生方→ピブスの配布、着用、整列のサポートをお願いします。（椅子にすわって待機）
進行：大学生		
1	自己紹介をしよう。 〔自分の名前 好きな〇〇〕	児童→大学生の自己紹介が終わった後、ピブスの番号順にカメラの前に出てきて自己紹介。 学生→画面共有をしながら自己紹介を行う。 先生方→自己紹介の順番のサポートをお願いします。
2	アイスブレイク クイズ大会	児童→ステージから降り、画面に収まる範囲で画面に近づいて座る。 学生から出されるクイズに答える、自分たちで考えたクイズを出題する、を交互に行う。 学生→子どもたちが出されたクイズを画面上で確認できるように視覚資料を作成、提示。子どもたちが考えたクイズに答える。1問目は学生から。 先生方→各学年で2問ずつ（簡単なクイズと難しいクイズ）を考えるよう、事前準備をお願いします。また、当日の隊形移動についてもサポートをお願いします。
3	ダンスで体を動かそう ♪エビカニクス	児童→1回目 画面共有される動画を見ながら体全体を使って踊る。 2回目 学生がポイントを伝え、それらを意識しながら練習として踊る。 3回目 学生の踊る様子を見ながら最終仕上げで踊る。 学生→1回目は画面共有を行い、自分たちも一緒に踊る。 1回目が終わったらポイントを伝え、指導をし、2回目を踊る。 3回目は画面共有をせず学生の踊りを見ながら踊ってもらうよう指示し、一緒に踊る。 先生方→画面内に収まるように決められた隊形に並ぶようにご指導いただきたいです。

図6 中学年の指導案の一部



写真2 低学年のリアクションゲームの様子

### (3) 感想等による分析

本取組の意義について検討するにあたり、A小学校の児童からは、「①『楽しかったこと』や『よくわかったこと』、②『難しかったこと』や『よくわからなかったこと』、③（大学生の）お兄さんやお姉さんへのメッセージ」の3点から、A小学校の6名の先生方からは「①授業に関すること、②児童との交流について、③オンライン交流という初めての試みについて、④交流会全体を通して」の4点から、受講学生からは「実践後のふり返し」として、それぞれに記述された内容から、本取組の成果や課題について分析することとした。

### (4) 倫理的配慮

本研究の対象者となった大学生10名およびA小学校の教諭6名、全児童27名へ対し、「本研究により得られたデータは、成績評価には一切関係ないこと、データの管理を厳重に行うこと、学会や論文等で研究成果を公表すること、またその際、個人が特定されることはないこと」について、大学生へは筆者が口頭で説明し、A小学校については、筆者がB教諭へ口頭で説明し、その内容をB教諭からその他の教諭や児童27名へ説明してもらえよう依頼した。結果、対象者全員から了承を得ることができた。

## 3. 結果および考察

### (1) A小学校の児童の記述から

#### ①「楽しかったこと」や「よくわかったこと」

低学年、中学年、高学年の児童全てから、それぞれに実施した内容が楽しかったと記述されており、全ての児童が楽しむことのできる交流会であったことがうかがえた。しかしながら、「よくわかったこと」に関する記述はなかった。体育授業において「わかった」という知識理解は、必ずしも必要な要素ではないものの、どうすれば運動ができるようになるのかがわかることも重要である。今回の実践にお

いては、コロナ禍で色々なことが制限されている状況下であり、体を動かすことで児童が楽しむことができることを優先したあまり、運動の経験を楽しむことにとどまってしまうが、今後は、どうすればできるようになるのかわかるような指導ができるように工夫していく必要があることが示唆された。

### ② 「難しかったこと」や「よくわからなかったこと」

低学年の児童からは、リアクションゲームで鬼に扮した大学生が金棒を振り回すタイミングに合わせて、金棒に当たらないように跳ぶという活動（写真2）があったが、そのタイミングを合わせることに難しかったという記述が多かった（9名中6名）。振り回している金棒にタイミングを合わせることを画面越しで行うことから、実際に金棒をよけられたのかどうか成功の可否が曖昧となってしまったことによる原因も考えられるが、リアクションゲームの醍醐味であるタイミングを合わせて動くというねらいに対する難しさであり、その意図が十分に伝わった結果であるとも推測できた。

中学年の児童からは、ダンスが得意ではないのでエビカニクスが難しかったと2名（8名中）が記述していたが、それ以外の児童（6名）は、アイスブレイクのために実施したクイズが難しかったと記述していた。

高学年の児童からは、10名全員がポッチャでねらったところへ投げるのが難しかったと技能的な点を記述していた。今回は、1回限りの交流会であったことから、そういった技能的な点を指導するまでに至らなかったことから、交流会を超えたオンライン実践を実施する際の課題となることが確認できた。

### ③ お兄さんやお姉さんへのメッセージ

全児童が、お礼や「勉強頑張って下さい」といった励ましのメッセージとともに、「またやりたい」「今度違うことをしてほしい」「今度は学校に来てほしい」といった記述をしていた。このことから児童にとって楽しい交流会であったことが確認できた。

## (2) A 小学校の先生方の記述から

A 小学校の6名の先生方からは、多くの肯定的な意見に加え、よりよい授業、交流会にするためのアドバイスについて、ご指摘いただいた。なお、手続きの不備により、個別の回答ではなく全員まとめた回答となったことから、各回答内容に対する人数の把握は困難であった。

### ① 授業に関すること

全学年を通して、良かった点や参考となった点として、「どの学年も、子どもたちの関心を引く仕掛けが多数あり、よかった。普段の授業とは違った子どもたちの目の輝きがあった」など、児童の興味関心を引く内容であったことが明らかとなった。

また課題として、時間配分のことや技能面への指導につ

いて指摘があった。

今回の実践では、体育授業であったとはいえ交流を重視しており、児童が十分に楽しめていた一方で、体育科として中核となる技能面に対する指導について十分な指導ができていなかったことが明らかとなった。

### ② 児童との交流について

全学年を通して、良かった点や参考となった点として、「事前にお名前や好きなこと、苦手なこと、意気込みなど伝えてもらい、やりとりを大切にしてもらった。そして、練られた授業をしていただき、限られた時間と空間の中で心が近づいたと感じる」など、今回実践するにあたり注意していた点についての成果を確認できた。

また改善点として、「他の児童が活動（運動）しているのを見る時間があると思うが、友達の動きを見て考えたことを発表する時間があってもいいのではないか」など、普段の対面授業であれば当然取り入れていたであろう対話的な活動について不足していたことが明らかとなった。

### ③ オンライン交流という初めての試みについて

全学年を通して、良かった点や参考となった点として、「オンラインで指導を受け、子どもたちが活動することが可能だということが分かった」「オンラインであるということのメリットは、互いに、互いの声をどうにか聴きとろうとし、どうにか見てやってみようとするところかと思った。普段の、教師が目の前にいて指示するような授業とは異なり、しっかり画面を見ておこうとする集中力があつたように思いました」「離れたところと交流ができることが最大のメリットであると思う。効果的に使えば、学校間交流ができたり、専門家の話を聞いたりすることもできるのだと思う。この交流をきっかけに、もう一歩踏み出したいと思った」など、オンライン実践のメリットや先生自身がやってみようという気持ちが芽生えたことがうかがえた。

また、「準備に関して、細かな点まで確認しておく必要があるなと思った。会議をするくらいなら特に問題はないのだと思うが、今回のように授業となると、打合わせが大切だと思う」「不具合が起きても対応できるだけの、パソコン操作の慣れが必要だと感じた」など、事前の打合わせの重要性やシステムトラブルの対応（それができる力量）が必要であることが確認できた。

### ④ 交流会全体を通して

全ての先生方から「何度も打合わせをしていただき、感謝の思いでいっぱいです。本当にありがとうございました」といった感謝の気持ちを確認することができ、今回の実践がA小学校にとっても貴重な機会となったことが確認できた。

一方で「オンラインもいいですが、体育はやっぱ、実際に目の前で接しながら、体を動かす方が気持ちいいですね」といった対面で指導することの重要性を指摘する意見もあった。

### (3) 受講学生の記述から

受講学生の「実践後のふり返し」から、10名中9名がオンライン実践ならではの難しさについて記述しており、具体的な内容は以下の6点であった。( )内の内容は筆者補足。

- ・双方向性を楽しめるような内容にすること  
(オンデマンド配信のようにならないように)
- ・動画を映す角度
- ・子供たちの立ち位置  
(密にならず、カメラに収まるように)
- ・動画の見え方
- ・音声の聞こえ方、タイムラグ
- ・システムトラブル時の対応
- ・子供の表情のわかりづらさ

また、それらの難しさを経験し理解した上で、よりよいオンライン実践ができるように力を付けていきたいといった記述が見られた(10名中9名)。

図7は、受講学生の「実践後のふり返し」の一部を抜粋した内容を示した。2021年はGIGAスクール構想元年と言われており、受講学生の記述にもあるように、今後はこのような実践がいつ求められてもいいように、教員養成段階での経験が重要となる。今後も教育現場との連携を図りながら、授業改善に努めていくことが重要となる。

・ コロナが収束した後も他の学校との交流会などで使えらと思うので、今回の学びを今後に生かしたいです。  
・ リモートで行うことによって様々な障害があり苦労することもたくさんあったが、結果としては私たちも楽しんで交流することができ、画面を通じて見た限りでは子どもたちも楽しんでくれていたように見えた。

図7 実践後のふり返りの一部抜粋

## 4. まとめ

本研究の目的は、小規模校の小学生と大学生による体育授業のオンライン交流会を実施し、参加者の感想等からその意義について検討することであった。

A小学校の児童の感想からは、楽しく活動に取り組んでいた様子がうかがえた。

A小学校の先生方からの感想からは、オンライン交流会に対する肯定的な多くの意見に加え、よりよい内容にしていくための改善点や、学生の指導力向上のためのアドバイス、ハード面に対する課題等が挙げられた。また、小規模校がゆえの交流会の意義についての重要性が再確認できた。

受講生のふり返しからは、教員養成段階の経験として、一定の成果がうかがえた。

これより、本取組が小規模校を対象とした遠隔教育の事例として一定の成果が得られたことが確認できた。

体育授業は、実技が中心となることからオンライン実践にはそぐわないといった考え方もある。今回の実践において、体育授業としての成果を問われれば、それは大きかったとは言いがたい。しかしながら、コロナ禍で日常生活に限らず、行事等も制限されていた児童にとって、体を動かすことが楽しいと感じている児童は多いことから、今回の実践のように体を動かすことを通して交流することの意義は大きいと考える。と同時に、体育授業としての質をどのように高めていけるかも今後の課題である。

また、本取組のオンライン環境の設定(Zoomの招待やカメラ位置のセッティング等)については、大学教員によるものであった。学生教育を考えた場合、そういったマネジメント的な要素も含め、学生が経験しておくことが重要となる。オンライン実践について、学校現場の教員がかかえる課題を明らかにするとともに、学生教育の視点から、教員養成段階でどのような力を身に付けておく必要があるのかについて、より精緻な検討を行っていくことが今後の課題である。

## 文献

- 中央教育審議会(2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)。  
[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_14.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_14.pdf) (2021.9.3)
- GIGAスクール実現推進本部(2019)GIGAスクール構想の実現へ。  
[https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt\\_syoto01-000003278\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf) (2021.9.3)
- 萩生田光一(2019)子供たち一人ひとりに最適化され、創造性を育む教育ICT環境の実現に向けて～令和時代のスタンダードとしての1人1台端末環境～《文部科学大臣メッセージ》。  
[https://www.mext.go.jp/content/20191225-mxt\\_syoto01\\_000003278\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20191225-mxt_syoto01_000003278_03.pdf) (2021.9.3)
- コロナ緊急調査WG(2020)速報!コロナ緊急調査—with コロナ, post コロナ時代の「育ち」と「学び」を考える!。子どものからだと心白書。子どものからだと心・連絡会議編。平河工業社。pp.8-11.
- 文部科学省(2018)小学校学習指導要領(平成29年告示)解説体育編。東洋館出版社。

## 【附記】

本研究は、令和2年度教育学部研究助成(学部長裁量経費)教育学部GPの助成を受け実施した。